

身体の詩学

——シモーヌ・ヴェイユとD・H・ローレンス——

今村 純子

はじめに

『黙示録論⁽¹⁾』はD・H・ローレンスの遺作である。ローレンスは、触発の余地がなく、道徳が並べ立てられたような聖書、わけても「ヨハネの黙示録」に幼少期から激しい嫌悪を抱いていたという⁽²⁾。自らの死期を悟った人間が、残された時間と体力のなかで、もっとも嫌悪する聖書のテキストについて書き記す。その意味するところはいつたい何であろうか。それは、キリストの一二人の弟子のうちに裏切り者ユダが入り込まねばならなかったように、「ヨハネの黙示録」こそは、通常あえて見ようとする、まぎれもなくわたしたちの心性の一部だということである。その核には、わたしたちの心をどこまでも蹂躪し、どこまでも呪縛する「力の支配」とシモーヌ・ヴェイユ⁽³⁾が述べたものがある。「力の支配を認識しなければ、力の支配を重ん

じなければ、愛することも、正義であることもできない」(『イーリアス』、あるいは力の詩篇⁽⁴⁾)。『イーリアス』は、どこにも救いが見られない殺戮の物語である。だがそれと同時に、どうしようもなく歌いたい、どうしようもなく他者に伝授したいと思わせる詩でもある。この事実は、悪の根源まで降りていかなければ、わたしたちは、美にも、芸術にも、ひいては人生そのものにも触れられないということの意味する。さらにヴェイユは、「それにしても奇妙な世紀である。叙事詩の時代とは対照的に、戦争や政治における力の効果はつねに栄光に包まれていなければならない、それに代わって、愛においてのみ人間の悲惨さが見られるというのは」(『イーリアス』、あるいは力の詩篇⁽⁵⁾)と書き記している。だが、『黙示録論』の二年前に発表されたローレンス最後の長編『チャタレイ夫人の恋人』⁽⁶⁾は、まさしく、戦争による傷がどれほどまでにわたしたちの心を蹂躪

し、侵食するのか、そして愛における悲惨さを踏まえつつ、この愛における悲惨さがいったいどのようにして美による至高の歡びへと転換しうるのかを描き出した一書ではなかったであろうか。『チャタレイ夫人の恋人』は、禁忌とされている性愛を核に据えた、一大センセーションを巻き起こした作品でもある。だが世界中の人々の心を掻き立てることによって、逆説的にもローレンスは、わたしたちの心の奥底に潜む「ユダ」をあぶり出し、その「ユダ」が本書の登場人物それぞれと合わせ鏡となることで、現代において、けっして偶像崇拜に陥ることなく、キリスト教ではなく、キリストに倣って生きるとはいかなることかを描き出そうとしたのではないであろうか。¹⁰⁾

一 人とモノ

戦争で心身の深い痛手を被った人間がさらに深刻な身体障壁を負い、それゆえいっそう心が頑なになり、心ある人は離れ、その人の属性にだけ興味を抱く人しかまわりにいなくなるという人物を、ローレンスは、残酷なまでに徹底的に、チャタレイ夫人の夫クリフォードに造型してゆく。他方でヴェイユは、悪の根源についてこう述べている。「物が人間の役割を果たし、人間が物の役割を果たす。これが悪の根源である」(『工場生活の経験』)、と。さらに力に触れた者の物化をこう記している。「力は、それを被る者も、それを操る者も、違う仕方ではあるが、ひとしくその魂を石にする」(『イーリアス』、あるいは力

の詩篇¹²⁾)、と。クリフォードは貴族であるのと同時に、労働者をモノとしてしか見ない炭坑主であり、それゆえクリフォード自身がモノとなってしまっている。さらに、戦争のトラウマを象徴する深刻な身体障壁を負っているために、なおいっそう精神面での成功を証する社会的名声の獲得に躍起になっている。そうしたクリフォードのまわりに集まる人々のおしやべりはコニーことチャタレイ夫人にとって「騒音」でしかない。いっさいの生きているリアリティが感じられなくなったコニーは、ついに深刻な心身衰弱に陥ってしまう。このコニーを取り巻くきわめて個人的な状況は、実のところ、近代化する過程の世界の変化と類比関係を保っている。このマイクロコスモスとマクロコスモスとの均衡を、ローレンスは繊細に克明に描き出してゆく。

これが歴史なのだ。一つのイングランドがそれまでのイングランドを塗りつぶしてしまふのだ。炭坑はこれらの人々の邸宅を豊かにした。炭坑がそれまでのイングランドの田舎家を塗りつぶしてしまつたように、いま彼らはこの邸宅を塗りつぶしていく。工業国イングランドが農業国イングランドを塗りつぶす。一つの意味が別な意味を消してしまふ。新しいイングランドが古いイングランドを塗りつぶすのだ。新旧の連続性は有機的でなく、機械的なのだ。¹³⁾

この「力の支配」から逃れられる者はいない。『イーリアス』の登場人物の誰ひとり逃れられないのと同様に。なぜならわたしたちは、社会という集団から逃れて、森の動物や鳥たちのよ

うに生きることができないからである。それにもかかわらず、ローレンスは自らの作品で、究極の触覚を通した他者との出会いを核に据えることで、力の支配を逃れうるか細い可能性を見ようとしているのではなからうか。とはいえ、恋愛は金銭や名声と同様にわたしたちの集団への帰属意識を強化する役割をも果たしうる。「文明社会というものは狂っていた。金銭と、いわゆる愛とが、社会の二大狂気であった」。それゆえ端的には、わたしたちの日常を彩る「往復運動」から星辰の運動に倣う「円環運動」への転換の契機をもちえない。たとえば、心身衰弱に陥ったコニーに代わってクリフォードの介護を一手に引き受けるポルトン夫人は、二三年前に炭坑の事故で夫を亡くしている。ポルトン夫人は、「この上流社会の人間、爵位のある紳士で、本や詩を書く文学者で、グラフ雑誌に写真の出るような人間と接触することに、興奮を味わっていたのである」。そして、村の噂話を好んでクリフォードに語って聞かせている。だが本来は、「あらゆる人間が心から同情するような、苦悩に満ちた、打ちひしがれたものにたいする尊敬の念と、細かな心づかいをもってはじめて、ほかの人間のもっとも私的な事情を聞くのが許されるのである」。それゆえ「力」の上澄みに歓喜するこの女性は、コニーに吐気を催させる醜悪な存在でしかない。だが、コニーの恋人は誰なのだろうと思いはかり、連鎖的に亡くなった夫のことを考えるポルトン夫人は、「このクリフォードと彼が代表しているものすべてにたいして、大きな怨

みの念をコニーと共有していることを感じた」のである。そして、亡き夫が傍に居るといふその触覚の記憶が、潑刺とした恋愛の直中にあるコニーの姿を視覚的に捉えることで呼び覚まされ、互いに相容れないはずのコニーとつながる一点が憐れみの感情を通して溢れ出るのである。愛はこのように、連鎖的な広がりをも有している。

滑車が往復運動を円環運動に変えてゆくように、労働は本来、この世の往復運動を星辰の運行に倣う円環運動に変えてゆくはずである。だがヴェイユがテラー式労働現場で経験したのと同様、ローレンスが描く炭坑労働者たちは、「人間と屍の中間状態」(『イーリアス』、あるいは力の詩篇)である。ところがこの状態は、実のところ、支配階級の人間とて同様である。それは、世間を離れ、森で孤独に暮らすメラーズの次の独白に収斂される。

女が悪いのでもなく、恋愛が悪いのでもなく、セックスが悪いのでもなかった。悪いのは、あの向こうの方にある、邪悪な電灯や悪魔的な機械の騒音だった。機械的な貪欲なメカニズムと、機械化された貪欲な世界の中に、光を輝かし、灼熱した鉄を吐き出し、車輛の騒音を立てる巨大な邪悪物が横たわっていて、自己に合致しないものすべてを滅ぼそうと待ちかまえているのだ。それはまもなく森を滅ぼしてしまおう。そしてそれはやヒヤシンスも咲かなくするであろう。傷つきやすいものはすべて、鉄塊の下に蹂躪

され、滅びるほかないのである。⁽²⁰⁾

二 真空と沈黙

コニーの恋人メラーズが、森を保護する森番であることは重要である。ふたりが出会うのは森のなかのいつそうの空白である空地である。さらに両者のあいだに言葉はなく、ただコニーが雛鳥を見つめつつ流す一筋の涙のうちにコニーの優しさを見て取り、メラーズはコニーに敬愛の念を抱く。「優しい、そうだが彼女には、どこか優しい、育ってゆくヒヤシンスのそれに似た優しさ、今日のセルロイド製の女性には失われている優しいところがあつた」⁽²¹⁾。あるときは、故障したクリフォードの電動車椅子が情け容赦なくブルーベルの花を踏みにじり、あたかも踏みにじられるブルーベルの花同様に、顔面蒼白で、息も絶え絶えのメラーズをクリフォードはモノとしてこき使う。あるいはまた、雨のなかを突然コニーは裸で森のなかを飛び出してゆき、メラーズは自分も裸になってコニーを追いかける。これらは、けつして草木になれない、そして近代化とは無縁ではないらしい人間の戯画でもある。だが、「花はどんな天気でも外にいない」⁽²²⁾。この草木の必然性への同意の姿に倣おうとするその方向性を垣間見させる。その必然性への同意の方向性は、結局のところ、室内における性愛を通して、アダムとイヴが恥の感情を抱く以前に回帰することに収斂される。それはまた、精神的にのみならず、道徳的にも孤独であることに同意することでも

ある。⁽²³⁾

彼女は今、ありのままの自分という真の岩盤に達し、恥ずかしさという感情と無縁になっていることを感じた。彼女の自我はいま肉欲的な自我であり、裸となり、恥も感じなかった。彼女は勝利を感じた。自慢したいような勝利を感じた。そうだ！これがそうだったのだ！これが生命だったのだ！これが本当の自分自身の方だった！何かくしたり恥ずかしがったりすることはなかったのだ。彼女は一人の男とともに、一個の他者とともに、究極の自分の姿を理解した。⁽²⁴⁾

労働者をモノとして見るおぞましさはまた、上流階級の人間をその属性で見るとおぞましさと類似関係を保っている。チャタレイ夫人としてコニーに敬意を払う人はいても、ひとりの生身の肉体をもった女性としてコニーに敬意を払う人はひとりもいなかった。それぞれに個性があり、それぞれに人格があり、また男女は決定的に異なる生物学的構造を有しており、また、それぞれの人間は生殖も排泄もする。それらが「ないこと」にされる「既成品」を見る眼差し、仕草、身振り、言葉ほどおぞましく、人間を疎外するものはない。

ところでヴェイユも、『イーリアス』を優しさという観点から捉え直している。「ここから、『イーリアス』がただひとつの作品であることがわかる。それは、優しさからやってきて、そして太陽の明るさのように、ひとしくあらゆる人間に広がって

ゆく苦渋によるものである。語調が苦渋にまみれてしまうことはけつしてなく、そしてまた嘆きに墮してしまふこともけつしてない。どこまでも不正義である暴力に満ちた『イーリアス』の描写において、愛と正義はどこにもその居場所をもたないが、『イーリアス』は愛と正義の光で満たされている」と、この優しさとは、精神的にのみならず、道徳的にも孤独を余儀なくされた人間が、それでもけつして不正義に染まることがない「弱さの強さ」である愛が宿るただひとつの場所でもある。

三 個人と社会

森番であるメラーズは、別居中の妻の誹謗中傷によって異常な性的欲求の持ち主だと村中の評判を立てられ、支配階級に属する雇い主の妻コニーとの不義密通を噂される。このメラーズをローレンスは、「正義の人」として、「聖なる人」として描き出す。ヴェイユはもつともおぞましい光景として次のような比喻を用いている。「軽罪裁判所で流暢に気のきいた冗談を交えて話す裁判官の前で、ひとりの不幸な人もごもご口ごもる光景ほどおぞましいものはない」（「人格と聖なるもの」）、と。メラーズが置かれた状況とは、この光景における被告人の立場である。クリフォードの心象を代弁する村の人々は裁判官の立場にある。裁判官は流暢に、既成品の言葉を並べ立てる。他方で、被告人は何も話せず口ごもるばかりである。犯罪者のレッテルを貼られることほど社会すなわち集団から見捨てられることは

ない。そしてまさしく社会という集団に自らの師を売り渡すユダの裏切りを端緒に、世間の人々はもちろんのこと、二人の弟子すべてに見捨てられ、精神的にのみならず、道徳的に孤独である最たる状態が、キリストの受難である。神性と極刑の表象は表裏一体である。というのも、そこではいっさいの集団性が剝奪されているからである。神は不在である。あるいは、無限の距離に隔てられたところにいる。そして逆説的にも、そこにこそ至高の調和がある。ヴェイユはこう述べる。「キリストの叫びと〈父〉の沈黙とが交響し、至高の調和を奏でる。あらゆる音楽はその模倣にほかならず、わたしたちのうちで最高度に悲痛で甘美な調和による音楽であっても、この至高の調和にはるかに及ばない」（「ピタゴラス派の学説について」）、と。

とはいえ、聖書における受難のシーンはすでに固定されたイメージしか喚起しえず、たえずわたしたちを内側から触発する働きを有していない。そもそもわたしたちは聖人か俗人かの二者択一の属性を生きてはいない。わたしたちは聖なる部分も俗なる部分も併せもっている。いついかなるときにもけつして力の支配から自由ではない。「チャタレイ夫人の恋人」の掉尾に差し掛かっても、コニーはその階級から醸し出されるもので絶えずメラーズを深く傷つけている。たとえば、メラーズを侮辱することになる、あきらかに不合理なクリフォードへの弁明を、メラーズと一緒にするという目的達成のためには平然とおこなう。あるいはまた、メラーズの妻の野卑を知ってメラーズ

と関係をもったことを唾棄したい気持ちにかられる。それらはまぎれもなく、「セルロイド製の」、「既成品の」コニーの一部分である。あるいはまた、コニーの父も姉も、メラーズの知性と品性は認めながらも、メラーズが属する階級が自分たちに醜聞をもたらすことに耐えられない。この社会的上下関係における侮蔑の連鎖は留まるどころを知らない。

聖フランチェスコも、十字架の聖ヨハネも、権力を有している。かれらは唾棄すべき存在として、一二人の弟子から見捨てられたりはしない。裸であること、貧しさのなかにあることが徳であるならば、そもそも裸で、そもそも貧しい者はいったいどうすればいいのか、と『黙示録論』は問いかける⁽²⁸⁾。さらに、労働者の目的が金銭であるならば、労働者は存在しなくなるという矛盾をヴェイユは端的にこう指摘する。「小工場主や小商人が富めば、大工場主や大商人になる。教授や小説家や大臣は富んでいても貧しくても、教授であり、小説家であり、大臣である。だが、労働者が大いに富むと、労働者ではなくなる」(『奴隷的でない労働の第一条件』)⁽²⁹⁾と。

現実のなかではわたしたちは集団性から逃れて、すなわち、金銭や名声から離れて生きることではできない。だが、イメージのなかでは確かに生きられ、感じられる。コニーとメラーズがひとたび離れ離れになり、その眼差し、仕草、身振り、言葉、音が、記憶のなかで活き活きしたイメージとして息づくとき、メラーズは、神々しい優しさに包まれる。メラーズの村での悪

評が伝えられたのがクリフォードやボルトン夫人の手紙を通してであるならば、メラーズの神々しい優しさがコニーに運ばれるのもまた、手紙という「物質」を通してである。そこには、吐息も、眼差しも、仕草も、身振りもなく、あるのはただ、それらの知覚の活き活きしたイメージだけである。

過去のどんな悪い時代も、クロッカスを死滅させませんでした。女性の愛を滅ぼすこともできませんでした。だからどんな時代が来ようとも、あなたを求めの僕の気持ちを消すことはできず、あなたと僕のあいだにある小さな焔ほのおを消し去ることもできないでしょう。来年はいっしょになれるのです。僕は恐怖を感じていますが、僕とともに在るあなたを信じています。最善なるものを求めて力を尽くし、あとは、人間を超えたなにかを信じるほかありません。自己の最善のものをほんとうに信じ、あとはそれを超えた力を信じる以外、未来に確信を抱く道はありません。だから僕は、あなたと僕とのあいだにある小さな焔を信じるのです。僕にとつては今のところ、それが世界じゅうでただ一つのものなのですから⁽³⁰⁾。

種子は地中深く眠り、春が訪れるまで目覚めない。だが、コニーとメラーズに春が訪れる可能性はきわめて薄い。しかしただひとつ確かなことは、かれらの優しさは、けっしていかなる不正義も被らないということである。それはまた炭坑の事故で亡くなった夫への愛の確かさゆえに、クリフォードに寛大であ

ることが出来るポルトン夫人の優しさにも連なるものである。

というのも、そもそも生者と死者とは、無限の距離に隔てられている者同士であり、至高の調和が奏でられる条件を有しているからである。ヴェイユはわたしたちのうちなる相矛盾するふたつの欲望についてこう述べている。「恋人や友人はふたつの欲望を抱いている。そのひとつは、一方が他方のうちに入り込み、ひとつになるほどまでに愛し合うことである。もうひとつは、ふたりが地球の反対側にまで隔てられていても、ふたりの結びつきが少しも弱まらないほどまでに愛し合うことである。この世で人間が空しく欲するものはすべて、神においては完全であり、実在のものである。不可能なこれらの欲望はどちらもわたしたちの使命の徴のようにわたしたちのうちにある。そしてこれらの欲望がわたしたちにとって善きものとなるのは、もはやこれらの欲望を果たそうと希わなくなるときである」(「神への愛と不幸」)、と。

結びに代えて

シモーヌ・ヴェイユは、労働者に必要なものは美であり、詩であり、その源泉は、神であり、宗教である、と述べている。だがそれが具体的に何であるのかは詳らかにしていない。さらに、工場内の機械や素材の「映し出す」という働きに着目し、そこに宇宙の象徴を読み取る注意力の可能性について言及している⁽³³⁾。他方で、画家でもあるローレンスは、霧雨が灰色に映る

ことで夜の漆黒が知られるように⁽³⁴⁾、知覚、わけても視覚の働きに着目している。ローレンスにおける知覚の描写は、視覚と聴覚の輪舞としてあらわれ、触覚は、見つめられる眼差しや、戸が閉まる音といった、視覚と聴覚における余韻に極まっている。こうして、触覚が一瞬の現象に留まらず、永遠に奏でられるイメージとして花咲くのである。

愛し合うふたりの欲びが完全に共振することで得られる無の境地という「第二の誕生」、さらに、生者と死者をも包括する、かぎりなく隔てられた距離において奏でられる調和、このふたつの可能性をローレンスは、センセーショナルな性愛のプロットを意識的に設定することによって描き出そうとしたのである。

(1) *Apocalypse* 一九二九年に執筆。一九三〇年に出版。

(2) David Herbert Richards Lawrence, 1885-1930. イギリスの小説家・詩人。

(3) ローレンスは書物についてこう述べている。「ところで、書物はうちに究めつくせぬものを蔵している間は、かならず生き続けるものである。ひとたび測りつくされるや、ただちに生命を失う」D.H. Lawrence, *Apocalypse*, London, Penguin Classics, 1996 (1931), p.60. ○四年(一九五一年)、三一頁。

(4) 「諦念と冥想と自己認識の宗教はただ個人のためのものである。しかしながら、人は己れの本性のほんの一部においてのみ個人たりうる。他の大きな領域においては、人は集団である」*ibid.*, p.67. 前掲四八頁。

- (5) Simone Weil, 1909-1943. フランスの哲学者。
- (6) Simone Weil, 《L'Illade ou le poème de la force》, *Œuvres complètes de Simone Weil, Tome II, volume 3, Écrits historiques et politiques*. Vers la guerre (1937-1940), Paris, Gallimard, 1989, p.251. シモーヌ・ヴェイユ、今村純子訳『「イリーマス」あざむは力の詩篇』『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』河出文庫、二〇一八年、一九三—一九四頁。
- (7) *ibid.*, p.253. 前掲、一九七—一九八頁。
- (8) *Lady Chatterley's Lover*. 一九二六年に執筆を開始し、一九二八年に私家版を發表。一九二九年に性的描写を削除して出版。
- (9) キリスト者がつねに偶像崇拜に陥る危険性をシモーヌ・ヴェイユは次のように指摘している。「殉教者たちは神と離れてゐるとは感じなかつたが、かれらが念頭においたのは別の神であつた。それにおそらく殉教者にならなかつたほうがよかつたのである。責め苦や死のなかに見出したかれらの神は、ローマ帝国が公式に採用し、そして皆殺しとらう手段によつて押しつけた神と何ら変わらなう」Simone Weil, *Œuvres complètes de Simone Weil, Tome VI, volume I, Cahiers I (1933-septembre 1941)*, Paris, Gallimard, 1994, p.298. 山崎庸一郎・原田佳彦訳『カイエ』みすず書房、一九九八年、二〇五頁。
- (10) 小説家のアイリス・マードックにシモーヌ・ヴェイユの博士論文を提出したミクロス・ヴェイトは、その挿尾べにう述べらる。「実存主義、弁証法神学、聖書学復興の時代にあつて、シモーヌ・ヴェイユの思弁的神秘主義は、キリスト教的プラトニズムの偉大なな、それが現代に欠如してゐることを、たゞひとり孤高に証言してゐる」Milos Vek, *La métaphysique religieuse de Simone Weil*, Paris, Vrin, 1971, p.149. ミクロス・ヴェイト、今村純子訳『シモーヌ・ヴェイユの哲学』慶應義塾大学出版会、二〇〇六年、三四—三六頁。
- (11) Simone Weil, 《Expérience de la vie d'usine》, *Œuvres complètes de Simone Weil, Tome II, volume 2, Écrits historiques et politiques. L'Expérience ouvrière et l'adieu à la révolution*, Paris, Gallimard, 1989, p.295. シモーヌ・ヴェイユ「工場生活の経験」、前掲『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』八六頁。
- (12) Simone Weil, 《L'Illade ou le poème de la force》, *Œuvres complètes de Simone Weil, Tome II, volume 3, ibid.*, p.245. シモーヌ・ヴェイユ「「イリーマス」あざむは力の詩篇」、前掲『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』一七三頁。
- (13) D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*. London, Penguin Classics, 2008, p.156. ロレンス、伊藤整訳・伊藤礼補訳『チャタレイ夫人の恋人』新潮文庫、一九九六年、二八六頁。
- (14) *ibid.*, p.97. 前掲、一七四頁。
- (15) *ibid.*, p.100. 前掲、一八〇頁。
- (16) *ibid.*, p.101. 前掲、一八一—一八二頁。
- (17) *ibid.*, p.141. 前掲、二五八頁。
- (18) Simone Weil, 《Condition première d'un travail non servile》, *Œuvres complètes de Simone Weil, Tome IV, volume I, Écrits de Marseille. Philosophie, Science, Religion, Questions politiques et social (1940-1942)*, Paris, Gallimard, 2008, pp.425-426. シモーヌ・ヴェイユ「奴隷的むら労働の第一条件」、前掲『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』二一九頁。
- (19) Simone Weil, 《L'Illade ou le poème de la force》, *Œuvres complètes de Simone Weil, Tome II, volume 3, ibid.*, p.231. シモーヌ・ヴェイユ「「イリーマス」あざむは力の詩篇」、前掲、一二八頁。
- (20) D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover, ibid.*, p.119. ロレンス、前掲『チャタレイ夫人の恋人』二二五頁。
- (21) *ibid.*, p.119. 前掲、二二五—二二六頁。
- (22) *ibid.*, p.223. 前掲、四二—四三頁。
- (23) 「孤独のなかでのみ働さうな、稀有な質の注意力によつてのみ、非人格的なものへの移行が果たされる。実際に孤独であるだけではなく、道徳的に孤独であることが不可欠である。この移行は、自分がある集団の成員として、「わたしたちは」の一部分とみなして

- る人におらしてはけしこ果たされなり」 Simone Weil, 《La personne et le sacré》, *Écrits de Londres et Dernières Lettres*, Paris, Gallimard, 1957, p.17. シモーヌ・ヴェイユ「人格と聖なるもの」前掲『シモーヌ・ヴェイユアンソロジー』三三四頁。
- (24) D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, *ibid.*, p.247. ロレンス「前掲『チャタレイ夫人の恋人』」四五八頁。
- (25) Simone Weil, 《L'Illade ou le poème de la force》, *Œuvres complètes de Simone Weil, Tome II, volume 3*, *ibid.*, p.248. シモーヌ・ヴェイユ「『イーリアス』」あるいは力の詩篇」前掲『シモーヌ・ヴェイユアンソロジー』一八二頁。
- (26) Simone Weil, 《La personne et le sacré》, *Écrits de Londres et Dernières Lettres*, *ibid.*, p.14. シモーヌ・ヴェイユ「人格と聖なるもの」前掲『シモーヌ・ヴェイユアンソロジー』三二七頁。
- (27) Simone Weil, 《A propos de la doctrine pythagoricienne》, *Intuitions pré-chrétiennes, Œuvres complètes de Simone Weil, Tome IV, volume 2, Écrits de Marseille. Grèce-Inde-Occident (1941-1942)*, Paris, Gallimard, 2009, p.291. シモーヌ・ヴェイユ「今村純子訳『ピタゴラス派の学説について』」前キリスト教的直観」法政大学出版局、二〇一一年、一九五頁。
- (28) 「精神上的の貴族は自我実現と他者への奉仕のうち己が義務の遂行を見る。貧しきものに仕えよと云う。まことに結構である。しかし貧しきものは一体誰に仕えたらよいか」 D.H. Lawrence, *Apocalypse*, *ibid.*, p.28. D・H・ロレンス「前掲『黙示録論』」四八一—四九頁。
- (29) Simone Weil, 《Condition première d'un travail non servile》, *ibid.*, p.421. シモーヌ・ヴェイユ「奴隷的でない労働の第一条件」前掲『シモーヌ・ヴェイユアンソロジー』二〇七頁。
- (30) D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, *ibid.*, p.300. 前掲「ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』」五五九頁。
- (31) Simone Weil, 《L'amour de Dieu et le Malheur》, *Œuvres complètes de Simone Weil, Tome IV, volume 1*, *ibid.*, p.353. シモーヌ・ヴェイユ
- 「神への愛と不幸」前掲『シモーヌ・ヴェイユアンソロジー』二四九頁。
- (32) Simone Weil, 《Condition première d'un travail non servile》, *Œuvres complètes de Simone Weil, Tome IV, volume 1*, *ibid.*, p.432. シモーヌ・ヴェイユ「奴隷的でない労働の第一条件」前掲『シモーヌ・ヴェイユアンソロジー』二一〇頁。
- (33) *ibid.*, p.423. 前掲「二二三頁。
- (34) 「彼は彼女の前に立って、細い道を耐風ランプを振りながら進んだ。その光の中に、濡れた草、蛇のような黒く光る木の根、蒼白い花などが浮かび上がった。それらのもの以外は、あたりは一面灰色の霧雨と完全な闇だった」 D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, *ibid.*, p.127. ロレンス「前掲『チャタレイ夫人の恋人』」二三〇頁。
- (しまむら・じゅんじ) 哲学・美学、立教大学兼任講師)